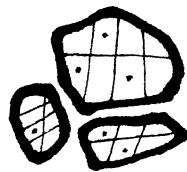


## 「大学再生の条件」を読む



宮本 益治

(東海学園女子短期大学)

少し前のことになるが、ゼミ学生をハワイ大学に体験入学させる機会があった。その際向こうの若手の教員に半ば冗談半ば本気で「大学の教員なんてやってられない」とついぼやいてみた。そうしたら「なぜやめないの?」と叱責交じりの返事をちようだいしてしまった。その真剣なまなざしに返す言葉を失った。私と同行していた他の教員が口癖のように言っていた「大学は教員の失業対策の場になっている」に拍手を送っていた自分が、瞬間急に萎縮していくような気がした。問いただすべきは自分自身であるような気がしてきた。

『大学再生の条件』は、一気に読んだ。一気に読めた。学生の実態調査の分析をはじめ、さまざまな授業の工夫やその根底にある教育思想は見事なものであった。畏敬の念

すら覚えた。しかし、こうして書くことを念頭に置き始めると、問題が、この本の中にあるのではなく、読み入っている自分自身の中にあることに気づき始めた。もう一度読み返そうという気になれなくなってきた。

■ □ 爽やかな亡霊？ □ ■

もったいぶるつもりは毛頭ない。ただ、少々こういう場で言うには気が引けるだけのことだ。「日々教育と校務に疲れきり、系統的な研究もおぼつかない、そんな毎日明け暮れているしがない私大の一教員の労働に一体どれほどの継続的なロマンがありうるのだろうか。」そんなやるせない気分をベースにして読み始めると、この本に盛り込まれているデータはすでに感覚的に十分把握されている事柄であるし、数値化されてもほとんど新鮮な驚きを与えない。

また、爽やかさを身にまとったつもりメッセージも、裏返しにみれば、かつての大学紛争時代の亡霊のようにも思えてくるのだ。かつてと違うのは、学生からのメッセージが教員からのそれにならわっているという点と、メッセージそのものが逃げ場のない切迫感と緊張感に欠けるという点だけだといえれば言い過ぎになるだろうか。大学再生を言

うなら、また「学生の覇気がなくなってきた」と言っただけなら、また「現状に甘んじている一部の（あるいは大部分の）大学教職員の再生の条件をマッタなしの形でつきつけられていないかどうか。もしそれをつきつけたら文部省のおもうつぼになるし、組合活動への広範な支持を得られなくなるとでも考えたほうがよいのだろうか。」

人間、疲れるとロクな受け止め方をしない。私の勤める大学が特別にヒドイだけなのか。それとも私が少々体力不足、研究能力、執念不足だけなのか。

■ □ 大学教員の再生の条件 □ ■

ここまで言ってしまうと、とめどもなく愚痴のようなものが後を追うように出てくる。「こまごまとした雑事はなるべく避けたい。時間はなるべく自分の研究時間にまわりたい。組合の仕事など冗談じゃない。漢字の間違い探して精一杯になるような水準の学生指導などもうたくさん。消耗感以外の何者も残らない学内行政もうんざり。給料さえいただければそれでいい。少しでも高い給料がいただければそれでいい。」人生そんなにうまくいくもんじゃないと諦めつつも、低次元化ないしは狭隘化していく生活感覚の

さらなる下降をおしとどめるすべもない。研究時間が欲しいといながら他大学に非常勤にでかける。本務校での教育で得られないアクセントにと表向きの理由をつけながら本音は小遣い稼ぎなのかもしれない。

『大学再生の条件』を読みながら、その実「大学教員の再生の条件」をひとりで考え込んでしまっている。自身自身のなかのオドロオドロした部分を拡大鏡に写し出すようにしてみる。そのおぞましさとみじめさの入り交じった心性に嘔吐感すら覚える。そしてそれを即座に否定しようとするカミシモを着たもう一人の自分。あるいは、月日の流れの中に忘却をきめこむ惰性。

ものごとを斜めにみだすときりがない。「研究に逃げろ」という表現がある。逃げていることが判らないくらい浮き世離れた研究者もまれにはいるが、そしてそうした人の研究が何十年も経つてから大きな評価をうけることもまったくないわけではないが、日本の大学とりわけ私大に許されている「懐」は限りなく浅い。時間もなければ金もない。「量は質を兼ねる」とはいうものの、よくいつて本数という名の「量」にしか逃げられない。若手はその「量」を執拗に追い求め、教授に上がりきってしまうと「量」とともに「質」も失う。学生と教育から逃げること

で「研究に打ち込む」のではなく「研究に逃げる」という在り方を指摘するのは、かなりブラックな見方か。

しかし、文部省はそこに照準を合わせて手抜かりのない「改革」を持ち出してきている。僕は日本の大学人に対する「横十字四方固め」の押さえ込み一本のカウントダウンが始まっていると考える。教育労働の負担増と「研究に逃げる」心性の拡大再生産が同時進行することで、あがけばあがくほどその押さえ込みから逃れなくなっていくような気がする。

#### ■□ 対話の場を広げよう □■

学生の抱える問題の中に、「時代」が鮮明に現れる。その「時代」に正面から向き合うことが教育の使命だとすれば、先述の色褪せたアナキーで黄昏時のロマンの陰影は消え失せていくはず。日々のリズムを夕暮れ時にカウントするような日常への自己批判が勢力をもちかえすのかもしれない。夜型の人間が久し振りに見た朝日が眩しい。僕は、もう一度この本をそんな朝日の下に読み返してみたい。

そう思い立つと、現状の大学がどこかすでにどん底から上向きに這い上がる時点を迎えつつあるような気もしてく

る。本書は、そんな勇氣やら展望を、物事を斜めから見ることには慣れ始めていた僕に注入しているようにも思われる。

本書の問題提起は、僕の中にかつての「亡霊」を思いださせるほどラディカルだといつてもよいのかもしれない。もしそうだとするならば（実は本書読了後に最初に考えたことなのだが）、この本を「大学教職員再生の条件」確立のための道具とできないか。放っておけばおそらく手にする事のない教職員に是が非でも読ませる。合意が得られれば教職員組合で大量に買い込み、それぞれの大学・職場の「再生の条件」についてシンポジウムなどが開けるようにするといひ。

悩みつつ書き進めてきたわりに結論は、あまりにも簡単すぎるが、今押し寄せてきている大きな波に、わずかかどうかはわからないが残されている大学人の良心までもものまわされてしまわない努力をすれば、一人でも多くの人にこの本を読んでもらい、対話の輪を広げることには尽きるような気がする。その仕事は研究所の仕事というより、この本を真剣に読んだ人すべての仕事であろう。